一年保育児と二年保育年長児との身体的差異について（第二回）

千葉大学教育学部附属幼稚園長
宮内　孝

一、調査の目的

本幼稚園のカリキュラム作成の基礎資料を得るとともに、具体的・効果的な指導をする手がかりとする。

二、調査対象

千葉大学教育学部附属幼稚園々児。

三、調査の種類

(1) 身長・体重・胸囲測定。
(2) 身体充実度。
(3) 体力測定。

四、調校の方法とその結果

(1) 身長・体重・胸囲の測定。

四月と十月の二回測定したが、第一表及び第二表でわかるとおり殆んど差異がない。ただ、体重の増減は第三表の月別体重測定表に表れたとおり差異が認められる。即ち、昨年度同様、一年保育児は体重の増減が著しいのに対して、二年保育児は恒常的な線を描いて増加している。

(2)、身体充実度

ピルケ氏の表 Pelidisi によって算出した早見表を用いて判定した。（幼児の教育第五十一巻第九号、珠川善子、鈴木信政両氏の報告書参照）

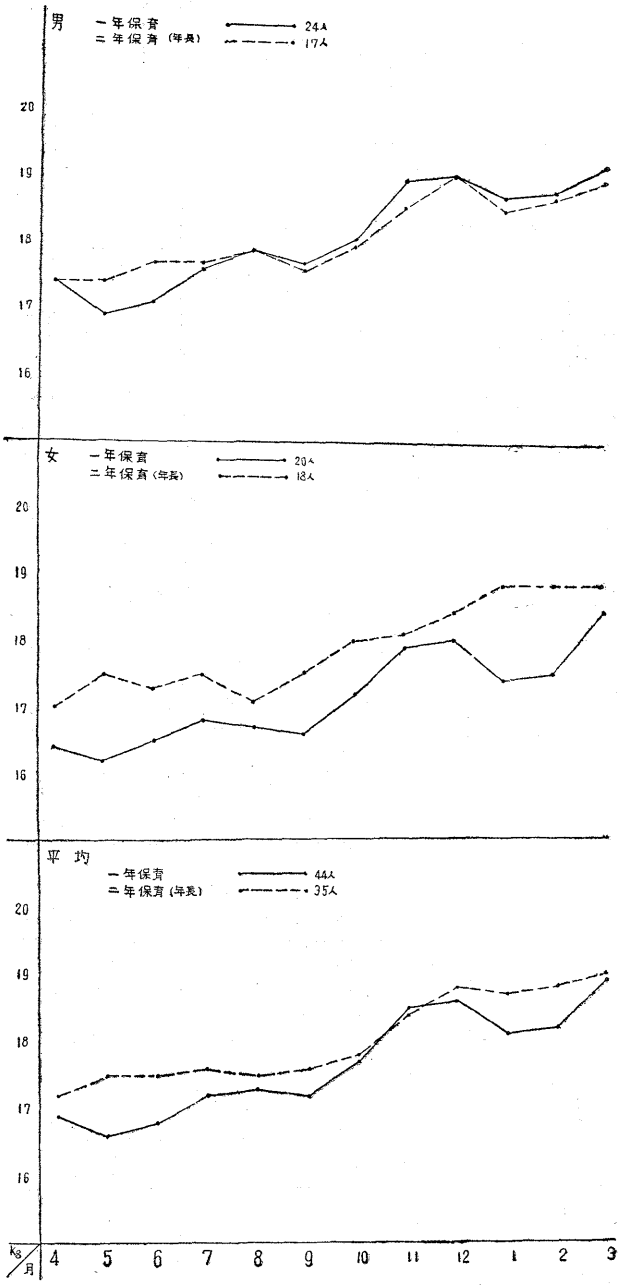
（第一表、第二表の身長・体重・胸囲測定統計表「昭和29年度」は頁数の都合により省略）

第四表 身体充実度頻数分配表（昭和29年度）

身体充実度 ＼ 性別・教育年限	男 二年保育	男 一年保育	女 二年保育	女 一年保育
86				1
87		2		3
88	1			2
89	4	3	2	1
90	2	4	3	2
91	4	7	5	1
92	2	2	1	1
93	1	3	2	2
94		2	1	
95		1		
96			1	1
97	1		2	1
N	1.5	24	17	15
M	90.80	90.10	92.05	90.26
S・D	2.1	2.0	2.5	3.3

第三表

月例体重測定表（昭和29年度）



結果は、その頻数分配表（第四表）によってわかる通り男子は殆んど同程度であるが、女子は二年保育の方がはるかに望ましい状態である。

(3)、体力測定

昨年と同様の方法で四月と十一月の二回測定した。（幼児の教育

第五表　体力測定表　(昭和29年度)

調査日	種目	性別 教育年限	男 二年保育(17人)(5歳5ヶ月)	男 一年保育(25人)(5歳6ヶ月)	女 二年保育(18人)(5歳4ヶ月)	女 一年保育(22人)(5歳5ヶ月)	平均 二年保育(35人)(5歳5ヶ月)	平均 一年保育(47人)(5歳6ヶ月)
四月調査	疾走 (秒)		6,49	7.28	7.33	7.89	6.92	7.57
	立巾跳 (ｃｍ)		122,76	113.52	109.27	107.00	115.82	110.26
	片足跳 (回)		右 1.55 左 2.10	右 1.3 左 1.66	右 1.54 左 2.00	右 1.96 左 1.82	右 1.57 左 2.07	右 1.61 左 1.73
	投擲 (M)		7.97	6.76	4.01	4.43	5.93	5.65
	竹登り (%)		不 11.7 中 23.5 成 64.7	不 32.0 中 16.0 成 52.0	不 50.0 中 27.8 成 22.2	不 72.7 中 22.7 成 4.5	不 31.4 中 25.7 成 42.8	不 51.0 中 19.1 成 29.7
	懸垂 (秒)		58.57	71.99	46.40	86.40	52.31	78.74
十一月調査	教育年限		二年保育(16人)(5歳11ヶ月)	一年保育(24人)(6歳0ヶ月)	二年保育(16人)(5歳10ヶ月)	一年保育(17人)(5歳11ヶ月)	二年保育(32人)(5歳11ヶ月)	一年保育(41人)(6歳0ヶ月)
	疾走 (秒)		6.36	6.63	6.80	7.22	6.58	6.87
	立巾跳 (ｃｍ)		123.41	116.10	105.94	112.80	114.93	114.50
	片足跳 (回)		右 1.67 左 2.40	右 1.49 左 2.10	右 2.44 左 2.22	右 2.90 左 1.95	右 2.06 左 2.31	右 2.20 左 2.02
	投擲 (M)		11.01	7.89	4.81	5.65	7.91	6.77
	竹登り (%)		不 0 中 25.0 成 75.0	不 20.8 中 25.0 成 54.2	不 25.0 中 25.0 成 50.0	不 11.8 中 23.5 成 64.7	不 12.5 中 25.0 成 62.5	不 17.0 中 24.4 成 58.5
	懸垂 (秒)		109.56	83.23	68.91	85.37	89.24	84.30

第六表　小学校第一学年体力測定表　(昭和30年4月調査)

種目	入学前歴	男 附属幼稚園からいったもの (20人)	男 家庭その他からいったもの (22人)	女 附属幼稚園からいったもの (18人)	女 家庭その他からいったもの (27人)	平均 付属幼稚園からいったもの (38人)	平均 家庭その他からいったもの (49人)
疾走 (秒)		12.19	13.38	13.05	14.41	12.61	13.90
立巾跳 (ＣＭ)		124.11	121.14	119.65	119.65	121.88	120.37
片足跳 (回)		右 2.58 左 3.19	右 2.12 左 1.67	右 2.79 左 3.03	右 2.45 左 2.19	右 2.69 左 3.11	右 2.29 左 1.93
役擲 (M)		10.9	10.30	5.6	6.0	8.3	8.2
竹登り (%)		不 15.0 中 15.0 成 70.0	不 19.0 中 38.1 成 42.9	不 38.9 中 44.9 成 16.9	不 23.1 中 50.0 成 26.9	不 27.0 中 29.7 成 43.3	不 21.1 中 44.1 成 34.8
懸垂 (秒)		129.90	110.13	99.45	118.71	114.68	114.42

第五十三巻第九号参照)

結果は第四表の通りである。これによると、(イ)、両回とも一年保育児よりも二年保育児の方がよい (ロ)、一年保育児も二年保育児も共に四月よりも十一月の方がよくなっているが、一年保育児の方が発達が著しい。

(ハ)、特に走投跳に比し学習によってより発達する片足跳と竹登りにおいて著しい。

なお、参考までに小学校就学直後における幼稚園からいった児童と家庭その他からいった児童との比較表を掲げておく。(第六表)これは千葉大学教育学部付属第一小学校の一年生について調査したの

であるが、この小学校は学区制をしており、或部落の児童全員無条件に入学するので普部の小学校と同様である。付属幼稚園から進学する以外は殆んど大部分家庭から直接入学する。

保育環境が歯（乳歯）の石灰化に及ぼす影響について

保育医学研究会
深田英朗

緒言

戦後一〇年乳幼児の体位も漸次向上し、乳児死亡率も著しく低下した事は周知の事実である。

然るに乳幼児の歯牙疾患とくに齲蝕症はひとり年々増加の傾向をたどりつつある事は誠に我々小児歯科学を専攻する者にとってゆううつの種である。

さて、ムシバ予防法は従来より幾多の研究業蹟もあり、例えば、鉱銀法、弗化ソーダー法等々色々あるが、いずれも今日その効果は未だ充分に期待出来ない。いわゆる建設医学的立場にたつ保育医学の観点からも本質的なものと思えない。

私共は強い歯質の建設こそ、ムシバ予防の第一段階と信じ、歯質の形成に保育環境が以外なる影響を及ぼすか、本研究に於て調査し

表 1　妊娠中の状態と石灰化

母胎状態＼灰化段階	A	B	C
健	11 7.6%	83 57.2%	51 35.1%
否	0	9 47.4%	10 52.6%

表 2　生下時体重と歯の石灰化

生下時体重＼灰化段階	A	B	C
3000g 以上	9 9.6%	56 59.6%	29 30.8%
2500g～3000g	1 2.0%	30 58.3%	20 39.2%
2500g 以下	1 5.3%	7 36.8%	11 57.9%

表 3　授乳法と歯の石灰化

授乳法＼灰化段階	A	B	C
母乳	9 8.6%	58 55.2%	38 36.2%
人工	1 6%	8 47.0%	8 47.0%
混合	1 2.4%	28 66.6%	13 31.0%

表 4　乳児期の健否と歯の石灰化

乳児期状態＼灰化段階	A	B	C
健	10 8.1%	76 61.2%	38 30.7%
否	1 2.5%	16 40,0%	23 57.5%